

TOKYO BORDERLESS THEATRE PROJECT 2023 → 2025



在住外国人とともに作る
市民演劇プログラムと
その担い手育成のための
プログラム実践

TOKYO BORDERLESS THEATRE PROJECT 2023 → 2025



だれもが文化でつながるプロジェクト

Tokyo Borderless Theatre Project

2023→2025

在住外国人とともに作る
市民演劇プログラムと
その担い手育成のための
プログラム実践

目次

03 発行にあたって

04 はじめに

07 SECTION 1

劇場から多文化共生社会を目指すために

08 SECTION 2

Tokyo Borderless Theatre Project (TBTP)とは

11 SECTION 3

ワークショップ編

19 SECTION 4

クリエイション編

27 SECTION 5

人材育成編

32 SECTION 6

プロジェクト参加者の声

34 SECTION 7

寄稿

37 おわりに

38 実施記録





発行にあたって

障害の有無、言語・文化の違いを超えて、多様な人々が文化事業に参加し、ともに創造していくための環境整備や調査・検証・開発に取り組む「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」は、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の共催で実施しているプロジェクトです。芸術文化を通じた共生社会の実現を目指し、東京都の2030年に向けた文化政策（「東京文化戦略2030」）に基づき展開しています。

同プロジェクトの一環として、2023年度に始動したのが、「パートナープログラム」です。文化施設、NPO、研究機関や文化事業に関わる多様な担い手と連携し、文化施設や文化事業のアクセシビリティ向上に関わる様々なテーマのもと事業モデル開発に取り組んでいます。

そのうちのひとつとして、東京芸術劇場が企画運営を担い実施したのが、「多文化共生に向けたプログラムと担い手育成におけるモデル開発」（2023-2025）です。2つの柱として、“劇場における市民参加型演劇プログラムの開発”と、そうしたプログラムの企画運営を担う“人材育成プログラムの開発”を設定し、在住外国人の方々の芸術文化を通じた社会参加の機会創出を目指し展開しました。

開発の前提となる課題意識としては、在住外国人の方々が主体的に参加し多様な人々と共創する演劇プログラムが少なく、さらには、そうしたプログラムの企画運営を担う人材が不足している、という状況がありました。3年間にわたるパートナープログラムの実践では、長年ドイツの市立劇場等で市民参加型演劇プログラムに携わるバッサム・ガジ氏に伴走いただき、日本の状況に合わせた事業モデルの開発に取り組みました。また、将来的に事業モデルを実装する際に、企画運営者や参加者が目的やニーズに合わせて選択肢をもてるよう、“多言語・多文化間の交流や相互理解のためのプログラム（ワークショップ）”と、“在住外国人が表現者として芸術作品を共創するためのプログラム（クリエイション）”を設計しました。

本書では、事業モデル開発の実践の場として展開した「Tokyo Borderless Theatre Project」の実施報告を中心に、多様な人々とともに現場をつくりあげるなかでみえてきた、気づきと課題、そして展望について紹介しています。

本書は、公共劇場において、日本語を母語としない在住外国人の方々が鑑賞する機会が限定的であり、さらに表現の場への参加にいたっては情報取得さえままならない状況の改善に向けたひとつの手立てとして、市民参加型の演劇プログラム開発に着手し、そのプログラム運営に従事する人材の育成を3年間にわたって試行錯誤したプロジェクトの記録です。

多国籍の人々が集う場での表現や創作において何が難しいかという点、当然のことながら、まず言語コミュニケーションが思い当たるでしょう。日本語を母語とせず、共通言語が英語に限らない環境でジェスチャーを交えたり、絵を描いて説明したり、翻訳機能を駆使したりと、相互理解をサポートするための工夫はいくらあっても足りません。

次に、文化的・歴史的背景への配慮です。文化的習慣は参加者の数だけ異なりますが、ある人にとっての「常識」がほかの人には「非常識」や「侮辱」になったりします。また、宗教的な配慮が必要だったり、国や地域間の衝突の歴史が個人間の交流に影を落とすこともあったりするなど、考慮すべきことは山のようにあります。

しかし芸術とは本来、多様な文化が交差したり衝突したりする中でこそ生まれるものであり、そうした一見“面倒”なステップに丁寧に向き合い、自分とは異なる文化を持つ人と協働する中で創出される、新たな表現や世界観に直面する時にこそ豊かな創造性が広がり、国や文化の違いへの敬意と理解が深まります。

在住外国人との演劇プログラムの取り組みが日本において思うように加速しない理由のひとつとしては、日常生活において日本語が母語ではない人々と接点を持つアーティストが少なく、日本語という「武器」を取り上げられた時のコミュニケーション力を養ったり、表現活動の経験を重ねたりする機会が乏しいことが考えられます。これまでの多文化共生を目指すワークショップの中でも、豊かな想像力を持つはずのアーティストが、外国人が創作の場に参加した際に、どのようにアプローチするかを悩み、共創の場において最適な表現を見出すのが難しい、という現象をよく見かけました。

そのため本プロジェクトでは、ドイツからバッサム・ガジ氏という、自身も難民であり、筆舌に尽くしがたい経験を経て演出家・ダイバーシティトレーナーになったアーティストを招き、外国人参加者を迎えてワークショップの試行に取り組みました。ガジ氏の傑出した点はいくつもありますが、第一に

誰でも参加したくなるような穏やかな空気感を作ることに長けています。演劇初心者や、言葉に障壁がある人でも気軽に楽しめるシアターゲームを展開し、それをいくつか重ねるうちに見事なパフォーマンスを作り上げていくのです。また、そのような遊びとしか思えないワークを通して短時間で参加者の文化的背景が浮かび上がり、自己紹介しなくても互いを知り、関心を持ち合うようになるアプローチにも驚かされました。

そうして開発するワークショップでは、以下の3つのステップが核となりました。

- 1 安心・安全を感じられる場づくりの中での、誰でも楽しめる簡単な動きやワーク
- 2 ワークを通して、個人のバックグラウンドがさりげなく共有される
- 3 ワークで創作した動きやフレーズを繰り返すうちに出来上がるパフォーマンス

これらの核に沿って紡ぎ出されたワークショップ最後のパフォーマンスでは、外国人参加者たちはもはや日本語のサポートを要する「被支援者」ではなく、創造性に溢れた表現者となっていました。

のちに「Tokyo Borderless Theatre Project」と命名するに至る本事業では、ガジ氏から3年にわたって指導を受け、言葉や文化の異なる人が誰でも参加できる「ワークショップ」プログラムの開発を経て、在住外国人が主役や担い手として舞台に立つための「クリエイション」プログラムを開発し、そこに携わる人材を育成しました。これまで劇場にリーチすることがなかった在住外国人が表現の場を獲得し、舞台に立ち、多くの観客が彼ら彼女らの豊かな潜在的表現力の発露に出会い関心を持つ。そうした機会を提供を通して、公共劇場は舞台芸術を用いた多文化共生社会に寄与していくのだと思います。

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーのパートナープログラムとしては本年をもって終了しますが、この「ワークショップ」と「クリエイション」の両輪が絶えることなく回り続け、そこに関わった人々が「主体者」となり、文化的なボーダーをどんどん無くしていくことを願っています。



劇場から多文化共生社会を目指すために

なぜ劇場が多文化共生社会の実現と向き合うのか。その問いを軸にTokyo Borderless Theatre Projectは展開されました。プロジェクト始動の背景となる社会状況と、東京芸術劇場がプロジェクトを通して重要と考えた環境づくりについて提示します。

1-1 在住外国人を取り巻く状況と課題

東京都の人口約1400万人(令和7年時点)のうち、在住外国人は約5.2%を占める約77万人*にのぼり、その数は年々増加し、その国籍やルーツも多様化しています。その一方で、ともに地域社会を構成する「生活者」である在住外国人にとっては、言語や文化の壁による「社会的な孤立」や「自尊心の低下」、「情報が届かない」といった課題が顕在化しています。

このような課題は、劇場においても同様です。劇場は、あらゆる人が表現に出会い、自ら表現者となることで、交流や居場所を見つけられる「開かれた場」であるべきです。そして芸術は、文化芸術基本法の前文にあるように「多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するもの」でなければなりません。しかし、現状は、在住外国人が気軽に劇場に集うにはたくさんのハードルがあります。特に自ら参加して表現・創造する市民参加型プログラムにおいては、「実施件数が少ないこと」「情報が届かないこと」「自らの表現が受け入れられる場だと認知されていないこと」「専門人材の不足」といった課題が存在します。

*東京都 外国人人口『区市町村別国籍・地域別外国人人口(上位10か国・地域)』(令和7年10月1日現在)

1-2 本プロジェクトを通して、劇場から目指す多文化共生社会

このような社会的背景と課題から、劇場において在住外国人が主体的に参加する「市民参加型プログラム*」の実施などを通して、以下のようなアプローチと環境づくりを実現することが重要と考えます。

①劇場プログラムへのアクセシビリティの向上

国籍や言語、文化などに関係なく、表現したいと思った人が、劇場プログラムに気軽に参加できる環境があること。

②参加者の創造性が発揮できる芸術性の高いプログラムの構築

本来一人ひとりが有する多様で豊かな創造性を発揮し、表現者として芸術性の高いクリエイションに参画する機会を創出すること。

③社会的なつながりとコミュニティの構築

表現活動を通して、コミュニティとのつながりや、社会の中での居場所を見出すきっかけとなるような機会を提供する。

④相互理解を促進する媒介としての役割

在住外国人と交流のないことで、「異質な他者」として警戒心や恐怖心を抱いている地域住民(日本人)に、相互理解に向けた交流の機会を提供する。

*本稿における「市民参加型プログラム」とは、地域に暮らす人々が表現の主体として、劇場の活動に参画する取り組みを指します。例えば、簡単な遊びを通じて異なる世代や立場の人々が交流を深める演劇ワークショップや、演出家とともに市民が舞台作品を創り、出演するプログラムなどが含まれます。

次の章からは、Tokyo Borderless Theatre Projectの3年間の実践を「ワークショップ編」「クリエイション編」「人材育成編」に整理し、それぞれに対応する実践の概要とその中から得られた気づきをまとめます。

Tokyo Borderless Theatre Project (TBTP)とは

Tokyo Borderless Theatre Project (以下、TBTP)は、在住外国人とともに作る市民演劇プログラムと、その担い手育成における事業モデル開発の一環として取り組んだプロジェクトです。プロジェクト名は、2024年度に在住外国人とともに、異文化間の対話から演劇を立ち上げることを目指した創作トレーニング・プログラムを開始する時に、長期的な発展を願って名づけたものです。

2-1 TBTPの3つのアプローチ

事業モデルの開発に向けて、3つのアプローチを軸にプロジェクトを構成しました。

- ① **ワークショップ**
言葉や文化の異なる人々が誰でも参加できる、自己表現や交流、他者理解のためのプログラム
- ② **クリエイション**
在住外国人が俳優や創造活動の担い手として演劇作品を創作するプログラム
- ③ **人材育成**
ワークショップやクリエイションの企画運営を担う人材の育成

	アプローチ	ワークショップ・クリエイションの試行を通して育成する人材像
ワークショップ	ワークショップ開発: 日本語を母語としない人々を対象とした、ことばや文化の違いを越えて表現、交流する演劇ワークショッププログラムを開発	<ul style="list-style-type: none"> ◎ ワークショップ・ファシリテーター 日本語を母語としない人々を対象とした、ことばや文化の違いを越えて表現、交流する演劇ワークショッププログラムを開発できる人材 ◎ コーディネーター 参加までの道のりを設計し、日本語を母語としない人が安心して参加できる環境を整える人材
	創作のためのトレーニング・プログラム開発: 異なる言語と文化を持つ多様な人々との創作に必要な手法を身につける トレーニング・プログラムの試行を通して、異文化間の相互理解のワークショップや公演に向けたトライアル・ワークショップを実施	<ul style="list-style-type: none"> ◎ ワークショップ・ファシリテーター ことばや文化の違いを越えて表現を引き出し、交流を生み出す人材 ◎ コーディネーター 参加までの道のりを設計し、日本語を母語としない人が安心して参加できる環境を整える人材 ◎ 演出家 多様な文化的背景を持つ人々の特性を生かしてストーリーを構築できる人材
クリエイション	クリエイション試行: 前年に育成した人材とともに、在住外国人とそれぞれの言語や文化を生かした演劇を創作する	<ul style="list-style-type: none"> ◎ ファシリテーター、コーディネーター、演出家、これら3つどの役割を担う場合でも、その根底に参加者の思いを引き出し、言語に寄り過ぎず柔軟なアプローチで、フラットな関係作りをする「ファシリテート」能力を持つ人材

2-2 TBTPの取り組みの変遷

在住外国人が参加できる市民参加型プログラム自体が、多くの劇場では実施されていないこと、また、そうしたプログラムの企画運営を担う人材が不足していること。そうした課題をふまえ、TBTPの変遷は、プロジェクト名が生まれる前年の2023年度からはじまります。

2023年度

言語や文化の違いを障壁としない演劇ワークショッププログラムの開発と、それに携わる人材(ファシリテーター、コーディネーター)の育成プログラムを実施しました。

現状、多くの在住外国人は言語の壁により、鑑賞や表現の場に関する情報取得さえ困難な状況にあります。ワークショップを通じた交流や相互理解の場として一連の学びを終えた私たちは、日本語を母語としない人々が「参加者」としてだけでなく、「表現者」として人前に立つための場を用意することも必要、という確信を持ちました。なぜなら、参加した方たちの多くは、多少の言語的サポートが必要なこと以外において「被支援者」ではまったくなく、むしろ創造性に溢れた豊かな表現者だったからです。彼らがアクセス可能な機会が少ないことで、地域住民(日本人)との創造的な出会いの場が閉ざされ、相互理解や敬意を伴う共生が広がらない現状を打破していく必要があると考えました。

2024年度

そうした発見の過程を経て、2024年度は在住外国人を交えたワークショップから演劇作品として立ち上げ上演するための企画作成と、育成すべき人材として「ファシリテーター」「コーディネーター」に加えて新たに「演出家」を加えて、半年間にわたってトレーニング・プログラムを展開しました。

育成対象となる演出家は、日本語が通じなかったり既成の戯曲がなかったりする環境ではアプローチのイメージが湧かず、創作が停滞しがちな傾向にありました。実践を通じて、円滑な創作のためには演出家と共に、ことばや文化の違いを越えて表現を引き出すファシリテーターと、多角的な視点で創造環境を整えるコーディネーターの三者の連携が不可欠だということが確認できました。

将来的に在住外国人が演劇公演に出演したり、運営を担ったりすることが当たり前になっていくことを目指し、東京の中の目に見えない「文化的境界線」を取り除いていくという意味で、2023年度の取り組みまで遡り「Tokyo Borderless Theatre Project」と位置づけることにしました。

2025年度

2023・2024年度に育成した人材と彼らが作成した企画に基づいて、2025年度は「Tokyo Borderless Theatre Project 2025 ワークインプログレス」と銘打って、クリエイションの実践に取り組みました。3ヶ月間のワークショップと稽古期間を経て、東京芸術劇場のリハーサルルームでワークショップ企画1つとパフォーマンス作品1つを発表しました。パフォーマンス作品の上演では多国籍の観客を迎え、全3回すべてを満席で終えることができました。

今回の実践では、特定の「演出家」が単独で全体を統括するのではなく、「演出」「ファシリテーション」「コーディネート」といった各機能を、複数のメンバーが状況に応じて相互に補完し合う柔軟なチーム体制を構築することの重要性を再認識しました。

場づくりと人づくりは、いずれも長い時間をかけて試行と実践を繰り返しながら実績を重ねる必要があります。そこから生まれる人と人との関係性やコミュニティこそが重要です。様々な形でTBTPの取り組みに触れた経験を多くの人が持つことが、多文化共生社会の実現を後押しする力となるはず。東京芸術劇場では今後もワークショップと人材育成を継続しながら、いつか劇場での作品上演も視野に入れて、クリエイションの道を模索しつづけています。



3

ワークショップ編

多言語・多文化の人々とともにある演劇ワークショップとは、どのようなのでしょうか？

日本国内における実践例はまだ多くありませんが、共通言語を持たない環境では、日本語を中心に英語を補助的に用いて進行する手法が多く見られます。しかし、いずれも母語としない参加者には理解の困難さや心理的負担が生じやすく、継続参加に至らないケースもあります。また、ファシリテーター側にも、多言語・多文化環境に対応する進行・支援スキルを学ぶ機会が限られているという課題があります。

そこで、ドイツにおいて移民・難民との先駆的な取り組みを行うパッサム・ガジ氏を迎え実施した2023年度「多文化社会における演劇ワークショップ開発」より、そのポイントを紐解きます。

Workshop

3-1 「多文化社会における演劇ワークショップ開発」(2023)

2023年度に実施した「多文化共生の実現を目指した演劇ワークショップ開発」では、国籍や民族などの異なる多様な背景を持つ人々が参加・参画しやすいプログラムの開発と、その過程を通じて、多文化社会における演劇ワークショップのファシリテーターおよびコーディネーターの育成も目指しました。

講師には、移民・難民との共生に向けた先駆的な取り組みを行うバッサム・ガジ氏(Bassam Ghazi /元デュッセルドルフ市立劇場市民参加部門・芸術監督)を招聘。6日間の集中プログラムの中で、ガジ氏のその手法を学び在住外国人を招いてトライアルワークショップを行いました。

ガジ氏のワークショップ・プログラム開発は他者への細やかな配慮に満ちており、受講生は安心してその場において、発言できることを自ら体験しました。ワークに積極的に参加しづらい時の逃げ道がさりげなく備えられた環境の中で、自発的な小さな表現によって他者とつながり、誰もが達成感を得られる場を体験しました。言語や文化の壁を超えて交流を深める、多文化共生に向けた秀逸なモデルを学ぶ機会となりました。(実施:2023年11月-2024年1月)

バッサム・ガジ Bassam Ghazi

演劇教育家、演出家、ダイバーシティトレーナー

レバノン出身。教育および演劇教育について学ぶ。2015-21年、ケルン市立劇場で移民第2-3世代を中心に立ち上げた市民参加劇団「Import Export Kollektiv」芸術監督。2021-24年、デュッセルドルフ市立劇場で参加型市民劇団「Stadt:Kollektiv」を主宰。その後、ケルン市立劇場に戻り、市民参加部門ドラマトゥルクを務め、現在フリーランス。移民排斥事件の現場を巡るバスツアー「Solingen1993」の演出で、2024年ドイツ演劇賞「DER FAUST」受賞。ダイバーシティトレーナーとして、教育機関や文化機関向けに多様性、差別、エンパワーメントをテーマにしたトレーニングも実施する。



写真: Thomas Robsch

1 開発したワークショップの〈基本構成〉と〈目的〉

〈基本構成〉

在住外国人を対象とした劇場プログラムは、全国的に事例が限られています。と同時に、それを運用できる人材も多くないのが日本の現状です。また、参加する人のほとんどが初めての経験になることを想定し、心理的負荷が少なく、短時間で興味を掻き立てるような内容を目指して、以下を基本構成としたワークショップ・プログラムの開発を行いました。

- ◎時間設定を1回あたり2-3時間程度とする。
- ◎1、2回から数回程度の実施で完結する構成とする。
- ◎作品の創作・上演を前提としないが、ワークショップ内でプレゼンテーションをして、達成感を共有する。

〈目的〉

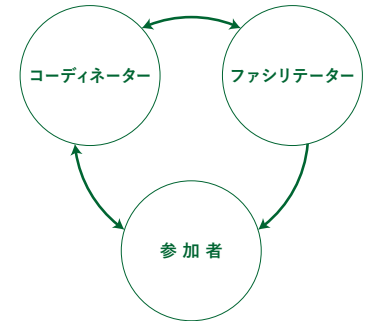
在住外国人や海外にルーツを持つ人々が、言語や文化の違いを障壁としない演劇ワークショップを通して、日本語のサポートがなくてもコミュニケーションや自己表現を活性化させたり、日本社会に居場所を見出すために、以下の要素を取り入れたプログラム開発に取り組みました。

- ◎自身のルーツを肯定する「自尊心の醸成」
- ◎自身を活かせる「表現の場の創出」
- ◎お互いの「コミュニケーションやつながりの構築」

2 運営・実施体制について

ワークショップの運営・実施にあたり、「ファシリテーター」と「コーディネーター」が協力して、「参加者」が常に快適に参加できる環境を整えます。

- ◎ファシリテーター:ワークショップのプログラムを作成し、ワークショップを実施・進行します。その際、言語の違いやそれぞれの慣習等を考慮して運営します。
- ◎コーディネーター:参加者とファシリテーターをつなぐ役割。参加者を募集し、参加者の言語レベルやバックグラウンドなどを把握してファシリテーターに伝えるとともに、参加者の状況に応じたプログラムになるよう助言・調整を行います。ワークショップ実施時には、ファシリテーターと参加者をサポートします。
- ◎参加者:日本語のレベルを問わず、在住外国人の方を対象とします。日本語教室や支援団体等で実施する場合は、その職員やスタッフも含まれます。



3 プログラムの構成について

在住外国人との演劇を用いたワークショップを実践するにあたり、ガジ氏より、以下の3つのセクションの構成が提示されました。

セクション1:ウォーミングアップ

- ◎チームビルディングのためのシアターゲーム、エクササイズ
- ◎類似点と相違点を探すワークでお互いを知り、つながる
- ◎価値と信頼を構築するため、交流のためのオープンな雰囲気を作る

セクション2:個々の物語を集会的な物語へ

- ◎自分の過去の物語を共有し、伝える
(社会から疎外された集団に関する単一的な物語ではなく、独自性があり、力を与えてくれるような物語を推奨する)
- ◎上記を通して、個々のアイデンティティと多様性を共有する

セクション3:グループによる演劇・手法の実践

- ◎個々の物語を紡いだ後、集団で創作する
- ◎振付や歌など多様なジャンルと演劇の融合
- ◎振り返りと自分の作品への反映

*ガジ氏のコンセプトシートより作成

左記を実施する際の注意点

- ・1回のワークショップですべてのセクションを完結させる必要はない。複数回のワークショップにわたり、セクション1から3を段階的に実施する計画も有効。
- ・プログラムの目的に合わせ「セクション1のみ」「セクション1と2」「セクション1と3」など、柔軟な組み合わせが可能。
- ・セクション1(ウォーミングアップ)は、時間の長短にかかわらず毎回実施することを推奨する。特に初回ワークショップにおいては、参加者の状況を鑑み、セクション1と2までにとどめておくことが望ましい。

Review

プログラム開発の様子

毎回ウォーミングアップから始まり、声を出すゲーム等を通じて段階的に瞬発力と集中力を高めていく。そこには講師や受講者だけでなく、スタッフや見学者も自由に参加するように講師が呼びかけることで、ワークショップは「見る／見られる」の関係性があいまいになり、共に場を温めていく時間になる。

講師はこれまで500回以上のワークショップを手がけ、その対象は幼稚園児から受刑者まで多岐にわたる。舞台芸術が生き物であるように、同じ手法を反復しても、別の現場では全く通用しないこともある。リーダーには常に試行錯誤が求められることを前提に、講師は自身の経験を現場のリアリティとして受講者と共有した。

実践したワークの多くは、まずはシンプルな動きを真似し、いつの間にか日常からかけ離れていくようにして始まる。ゲームとしての敷居は低くとも、徐々に負荷をかけ、意図的にカオス状態を作り出していく。講師はひとつのワークを終えるごとに、「ありがとう」と声をかけ、フィードバックの時間には受講者と同じワークショップリーダーの一員として目線を同じくしていた。

また、受講者の興味を引いていたのは、「真実を言わなくてもいい」というルールである。これは参加者の心理的安全性を守るために設定された。緊張を緩和させるユーモアは不可欠だが、現場は常に自分の意図しないところで権力や暴力が生まれる可能性を孕んでいることを、実践を通じて確かめ合った。

(松尾加奈氏のレビューより要約)



3-2 ワークショップ編の気づき

「多文化社会における演劇ワークショップ開発」を通して、在住外国人とのワークショップ実施にあたり、ポイントとなる点を整理しました。

1 プログラム開発において

①「表現」「創造」のための前提を意識する。

表現や創造的な活動を始める大前提として、参加者が心身ともに守られていると感じられることが重要です。そのため、ワークショップを実施する環境に「安心・安全の空間（セーフ・スペース）」を構築することを最優先として意識します。（発言しやすい環境づくりや、相手を否定しないコミュニケーションの姿勢を参加者の間で共有するなど）

②自分と他者を守る機能を工夫する。

参加者に心身ともにプレッシャーを与えないため、やりたくなければ休んだり、「本当のことを言わなくてもいい」というルールを設けたりするなど、可能な限りの工夫をほどこして場に関わるすべての人の尊厳を守ります。

③多文化共生における「繊細さ」を認識する。

多様なルーツを持つ人々から表現を引き出すことは、個々のアイデンティティや感受性に深く結びついた極めて繊細な作業であることを認識し、慎重にアプローチします。

④ファシリテーターの持続可能な関わり方を目指す。

多様な参加者の背景に配慮することは不可欠ですが、ファシリテーター自身が過度に神経をすり減らすことのないよう、コーディネーターと協力して持続可能な関わり方を目指します。

2 運営面において

①日本語話者とそれ以外の人のバランスを考える

ファシリテーターやコーディネーターが在住外国人とのワークショップに慣れていない時期は、日本語話者とそれ以外の人の参加の割合が半々になるようにします。参加者は演劇を用いたワークショップに初めて参加する場合も多いので、参加者数のバランスを工夫することで運営側・参加者側双方の言語的ハードルが低くなり、安心してワークショップを運営しやすくなります。

②日本語教室や支援団体と連携する。

プログラム開発の初期段階では、参加者を公募するのではなく、日本語教室や外国人支援団体等と連携することによって、指導者や支援者から情報を得られたり、協力を得やすくなります。それによって参加者に合わせたワークショップ・プログラムの準備につながり、言語や文化の違いに対する配慮も細やかになります。

③参加者の母語、もしくはやさしい日本語での案内文・チラシを作成する。

日本語教室や支援団体等と連携する場合は、参加が想定される人々にどの言語での案内が適切かを確認します。日本語で表記する場合は、以下に気をつけます。

◎文章は短くし、伝えたい内容は一文にひとつにする

◎漢語や敬語(尊敬語・謙讓語)は、簡単な表現にする

◎伝えたいことは はっきり伝える(曖昧にしない)

◎写真やイラスト、ジェスチャーなど 視覚的な補助を使う

3-3 クリエイションの前に(重要)

単発のワークショップであっても、最後にはその日にやったワークのいくつかを連続して互に見合うミニ発表を実施します。それは、その後の演劇創作につながる基礎ともなっています。

次章の「クリエイション編」=作品創作へともつなげる重要な点であるため、ガジ氏による3つのセクションのうち、「セクション3:コミュニティによる演劇・手法の実践」の中で語られたポイントを下記にまとめました。

①創作の倫理性:物語の「搾取」を避ける。

市民参加型プログラムにおいて、作り手は、表現を魅力的にするために参加者の人生を消費してしまうリスクを自覚しなければなりません。特に過酷な経験を安易に作品の「素材」として扱うことは、当事者への搾取につながる恐れがあります。リーダー(ファシリテーターや演出家)自身の表現欲求が参加者の尊厳を軽視していないか現場の権力構造に常に自覚的であるべきです。

②安全の確保:トラウマへの責任と「断る自由」を担保する。

過去の経験を舞台上で再現することが、トラウマを呼び起こす危険性があることを忘れてはなりません。リーダーの責任は、本人の意欲を尊重すること以上に、安全を最優先することです。「今はやめよう」とブレーキをかける勇気を持ち、参加者は本番直前まで出演を辞退することや、語らないことを選択できる権利を保障することが、活動の絶対条件です。

③表現の変容:舞台の先にある「日常」を想像する。

実体験をそのまま露出させるのではなく、演出的な工夫によって「物語」へと変容させるプロセスが参加者を守る盾となります。リーダーの想像力は舞台上の成果に留まらず、幕が降りた後に戻っていく、当事者の「日常」の平穏さまで行き届いていなければなりません。





4+

Creation

クリエイション編

異文化間の対話から立ち上げる 演劇創作とそのプロセスについて。

創作には様々な形式・過程が考えられます。ここでは、そのひとつの例として2025年度TBTP「ワークインプログレス『Door to Door』」の仕組みとその創作過程を概観し、気づきをまとめました。

4-1 「TBTP」(2025年度)

2025年度に実施した「TBTP」は、前述の通り、その前年度2024年度の人材育成プログラム「TBTP——異文化間の対話から演劇を立ち上げるための創作トレーニング・プログラム——」の受講者の中から選んだ企画の実現を目指しました。その実施体制においては、「ファシリテーター」「コーディネーター」に加えて新たに「演出家」の役割を設けて、ワークインプログレスとして創作・発表しました。多様な人々の文化的背景を生かして演劇作品を創作する〈クリエイションプログラム〉と、ワークショップ・プログラムの作り方やコーディネートの方を学んで発表する〈ステップアッププログラム〉の2つを実施しました。

〈クリエイションプログラム〉として採用された企画『Door to Door』は台湾出身の映画監督 鄭禹晨氏が企画・構成・演出を手がけました。「ふとしたきっかけから自分のルーツが浮かび上がる」をテーマに8つの国と地域の人々が集まり、発表まで試行錯誤を重ねました。チーム編成、創作プロセスの枠組み、参加者とのコミュニケーション、作品化への取り組み方など、ひとつひとつのプロセスが企画者にとっても運営チームにとっても大きな挑戦となりました。

また、参加者の背景は多様で、留学生、企業や公的機関で働く人やその家族、俳優活動を目指して来日した人、海外生活の長い日本国籍者、起業を志していた人、紛争の影響で避難してきた人などが含まれていました。出演者の語りから、日本での将来像や外国人受入れ政策の影響もうかがえました。

結果として出演者の満足度は高く、プログラム終了後もコミュニケーションが継続しています。また、作品を鑑賞した観客からは、多くのポジティブなフィードバックを受け取るようになりました。(実施:2025年8月-11月)



1 Creation クリエイション プログラム

『Door to Door』

企画・構成・演出:鄭禹晨(てい うしん)

東京で暮らしていて、ふと、自分のルーツやふるさとの記憶を思い出すときがあるでしょう。その「きっかけ」になるものは、音だったり、においだったり、風景だったりします。そのようなものを、ここでは「ドア」と呼びます。

外国にルーツを持つ人たちが、日々の生活で「ドア」を見つけ、演劇で自分のルーツを表現するワークショップ&上演プロジェクト「Door to Door (ドアツードア)」です。

*参加者募集チラシより

実施概要

◎実施期間

稽古:2025年8月24日(日)-10月31日(金) 13回

上演:11月1日(土)、2日(日) 3回

◎会場

稽古:豊島区内区民施設、東京芸術劇場リハーサルルーム 他

上演:東京芸術劇場リハーサルルーム L

◎参加者

12名 *ルーツ:中国、ベトナム、ウクライナ、フランス、日本、リトアニア、スロバキア、カナダ

2 タイムライン:『Door to Door』の運営とクリエイションの流れ

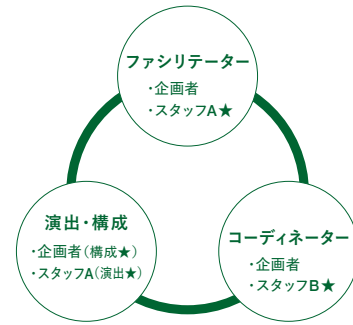
企画・運営の流れと作品創作に関する流れは、以下のとおりです。

2025年5月	運営チーム編成	
6月	プロジェクト概要・参加者募集概要決定	稽古内容の設計・検討
7月	参加者募集開始	
8月	募集締め切り オンライン面談 参加者の決定	稽古開始 DAY 1: WS テーマ「モノ」 DAY 2: WS テーマ「風景」
9月		構成台本作成・検討 DAY 5・6: WS テーマ「アイデンティティ」 *ガジ氏参加
10月	観客募集開始	DAY 7: 構成台本のための試行 DAY 8: 構成台本のための試行 舞台装置制作・字幕映像トライアル DAY 9: リハーサル DAY 10: リハーサル 音響・照明合わせ 会場セッティング
11月		DAY 11: 通しリハーサル DAY 12: 通しリハーサル DAY 13: ゲネプロ 上演

3 運営・実施体制について

『Door to Door』では、ワークショップ編のファシリテーターとコーディネーターに、作品化を担う「演出・構成」が追加されています。クリエイションチームの3人の主要なメンバー（企画者・スタッフA・スタッフB）は、主な役割分担はありますが、それぞれが横断的に役割を担いながら以下の運営・実施体制で企画を進めていきました。（★は主担当）

- ◎ **ファシリテーター**：アイスブレイクや出演者同士の交流を促進することに加え、クリエイションでテーマとする内容を引き出すためワークショップのプログラムを作成し、実施・進行します。その際、言語的な配慮や共同創作への心理的ハードルを下げる雰囲気づくりを行います。
- ◎ **コーディネーター**：企画と、出演者・スタッフ・社会（連携団体、観客等）とつなぐ役割。出演者の状況を把握し、ファシリテーターや演出担当者に伝えるとともに、参加者に応じたプログラムになるよう助言・調整を行い、安心して参加できるようサポートします。また、上演の情報を多国籍の観客に届けたり、その趣旨を社会に発信したりする役割も含まれます。
- ◎ **演出・構成**：出演者の多様性を生かすための企画を作成し、創作の過程で生まれた素材・表現などを組み立て、全体を構成して舞台芸術として作品化します。



4-2 クリエイション編のポイント

『Door to Door』の創作プロセスを通して見えてきた、クリエイションの現場での押さえるべきポイントを整理します。

1 募集・広報において

- ① **多言語対応で、様々な言語の人々の劇場への入口を作る**
出演者募集では、日・英・中の3種類のチラシを作成、応募フォームでは日・英・中・韓の5言語を併記し、参加への心理的なハードルを下げました。また、ワークインプログレスのチラシも日・英の2種類作成し、外国人観客へのアプローチを目指しました。
- ② **多様なコミュニティへのアプローチ**
劇場 SNS（日・英）だけでなく、日本語学校、国際交流協会、在住外国人の演劇団体、さらに関係者のネットワーク等を活用して、広く情報を届けることを意識しました。結果として、想定以上の出演希望者を集めることができました。
- ③ **出演希望者とのオンライン面談**
出演希望者全員と20分程度のオンライン面談を行いました。参加ハードルを下げるために面談を実施しない考え方もありますが、面談を通して事前に出演者のルーツや期待値を把握できたことは双方の齟齬を無くし、プログラム構築に反映するなど大きなプラスの効果が認められました。



2 クリエイションの過程において

- ① **出演者一人一人を尊重するコミュニケーションアプローチ**
企画者が出演者一人一人にスポットを当て、一人も取りこぼすことなく、丁寧にコミュニケーションをとり尊重する姿勢は、出演者自身が安心して自己開示ができる心理的安全性の確保につながりました。また、出演者自身の創意工夫や意見がクリエイションに取り入れられる手応えにより、自信や自己肯定感を得ることにつながっていったといえます。
- ② **出演者とのコミュニケーションを円滑にする工夫**
出演者への連絡メールは「やさしい日本語」と英語を併記しました。ワークショップと稽古では、活動内容を短文かつ日英の多言語表記のスライドで示し、視覚的なサポートを行いました。また、出演者から運営メンバーが得意としない言語での発言があったときは、出演者同士で通訳するなど、フォローがしやすい環境を目指しました。
- ③ **出演者が自由に参加できるフリータイムを設定する**
会場で舞台装置等をセッティングした後に、決められた稽古時間以外でも、出演者が自由に稽古場に居られるフリータイムを設定しました。出演者が、会場に慣れる、不明点を質問する、クリエイションチームのメンバーと自由にコミュニケーションを取り、主体的にモチベーションを高めることを狙いました。
- ④ **創作・倫理への配慮：センシティブな内容(重要)**
出演者の個人的でセンシティブなエピソードを構成に組み込む際は、構成案を作成する前段階で本人に確認しました。さらにリハーサル中にも再度確認を行うなど、丁寧な合意形成を徹底しました。
- ⑤ **作品として演出するための時間を確保する**
ワークショップや稽古の計画を立てる上で、構成案から作品として立ち上げるための時間を十分に確保しました。さまざまな手法を試しながら、上記④の対応や、出演者の主体的な表現を引き出せるよう作品化のための時間を取り、全員が納得して臨める構成にまとめました。

3 作品・上演において

- ① **観客に対する情報保障について**
ワークインプログレスでは、セリフを簡潔にまとめた字幕（日・英）投影を行い、多様な観客に言語の壁を超えて作品が伝わるように工夫しました。また、各回終了後に実施したアフタートークは、全て通訳（日・英）をつけて実施しました。
- ② **出演者（参加者）の言語と表現**
『Door to Door』では日本語の台詞を基調に、多様な言語を織り交ぜた作品となりました。作品内で使用する言語の使用については出演者の意思を尊重し、本人が最も表現しやすいという言語で行いました。

Step up

ステップアップ
プログラム

『記憶を探検する』

企画：張藝逸(ちょう げいいつ)

皆さんと池袋の街を歩いて、池袋の思い出を話したり聞いたりしながら、新しい池袋を見つけていきます。歩く、話す、聞くことを繰り返して、記憶の地図をつくります。皆さんと会話をしながら演劇をつくっていきます!日本語だけでなく、参加者の母語もつかえます。

*参加者募集チラシより

実施概要

公募で集まった参加者とともに、劇場がある「池袋」の街を歩き、それぞれの記憶を掘り起こすというワークショップを実施しました。それらの記憶をもとに参加者がそれぞれのストーリーを紡ぎ、パフォーマンスなども加えた個性あふれるプレゼンテーションを作り上げ、観客との対話を交えながら発表しました。

◎実施期間

稽古：2025年8月30日(土)–10月30日(木) 9回

発表：11月1日(土)、2日(日) 2回

◎会場

稽古：豊島区内区民施設、東京芸術劇場リハーサルルーム 他

発表：東京芸術劇場リハーサルルーム M3

◎参加者

8名

*ルーツ：中国、フィリピン、日本



エミリア：リトアニアのあの川が恋しいです
Emilija : I miss that river in Lithuania.



5 Human resource development

人材育成編

多様な文化的背景を持つ在住外国人が参画する演劇プログラムにおいて、その企画運営を担う人材に必要な役割とは、どのようなものでしょうか。

ここでは、2023-2025年度の実践を通して見えてきた人材育成のポイントと、3年間にわたって行った人材育成のプロセスを概観します。

5-1 本プロジェクトにおける担い手育成

本プロジェクトは、海外ルーツの人々が参画できるプログラム設計と、その運営を担う人材育成に取り組んできました。

バッサム・ガジ氏を迎えた2023年度は、ワークショップ開発を通して「ファシリテーター」「コーディネーター」の育成を実施しました。受講生が主体となったトライアル・ワークショップの実践では外国人を支援する国際交流協会などの関係者等からも高く評価され、終了後には受講生自らが活動を開始するなどの成果が得られました。

2024年度は、前年度の取り組みをもとに作品創作へと発展させる人材を育成することと、その後につながる上演企画の作成を目的として「ファシリテーター」「コーディネーター」に加え「演出家」を育成することになりました。「知る」「体験する」「作る」の三段階で構成されたプログラムを通じて、受講生は理論と実践の両面から多文化共生への理解を深めました。「知る」では在住外国人を取り巻く現状や制度、多文化共生の基礎知識を学び、「体験」では支援団体の訪問や異文化交流を通して、現場の課題や当事者の声に触れました。「作る」では在住外国人とワークショップを実施し、最終的には各自が独自の企画を立案しました。これにより、単なる知識の習得にとどまらず、他者と協働して創造的な関係を築く感性と実践力を養い、それぞれが職能を超えて対等に協働する体制の構築が重要であることを認識しました。

2025年度は、2024年度のプログラム受講者から選出された企画を演劇作品として立ち上げるという実践を通して、実際に「ファシリテーター」「コーディネーター」「演出家」の担う役割を整理しました。それぞれの役割を一人が担うのではなく、関わる人材が横断的に補いながら担える体制を構築することが、1-2で提示した〈4つの方向性〉*に近づくために有効であることが見えてきました。

*〈4つの方向性〉

- 1 劇場プログラムへのアクセシビリティの向上
- 2 参加者の創造性が発揮できる芸術性の高いプログラムの構築
- 3 社会的なつながりとコミュニティの構築
- 4 相互理解を促進する媒介としての役割

人材育成プログラムを通して見えたポイント

◎「演出する」「ファシリテートする」「コーディネートする」の3つの役割

多様な文化的背景を持つ在住外国人との演劇創作の実施・運営においては、「ファシリテートする」「コーディネートする」「演出する」の3つの機能が不可欠です。これらは個別の担当者に固定されるものではなく、状況に応じて役割をオーバーラップさせ、互いに補完し合う柔軟なチーム体制を構築することが重要です。

◎ヒエラルキーのない関係性

一般的な演劇創作では、主に「演出家」がリーダーシップを取って創作し、ヒエラルキーが生まれて伸びやかな創造環境を損なうことがあります。しかし言葉や文化が

異なる参加者が安心して表現できるように導く「ファシリテーター」、在住外国人が抱える課題を把握しながら参加しやすい環境を整える「コーディネーター」が、「演出家」と対等の立場で意見を出し合い、助け合う、または前述したように役割をオーバーラップさせることで、終始安心した創造環境を保つことができます。

多文化共生においては、対等な関係性を保つコミュニケーションや異文化の尊重、他者理解が不可欠であり、まず作り手側にその基盤が形成されることで、外国人参加者の協働にも生かされると言えるでしょう。

◎共通基盤としての「ファシリテートする」能力

どの役割を担う場合でも、その根底には「ファシリテートする」発想が求められます。参加者の声を丁寧に取り出し、言語に寄り過ぎず柔軟なアプローチで対応し、フラットな関係性で対話する場を維持する姿勢を、創作プロセスに関わる人全員が「必須のスキル」として習得することが、言語や文化の壁を超えた安全な創作環境を支える土台となります。

以下、本プロジェクトで実際に各役割が行った主な内容を挙げました。

◎ファシリテートする…企画に即したワークショップ・プログラムを作成・進行して表現へと導く。

- ・ 雰囲気をはぐすアイスブレイクの実施・進行
- ・ 出演者の表現・創造性を引き出すワークショップの設計
- ・ 誰も取りこぼさない、対等に発言できるワークショップの進行

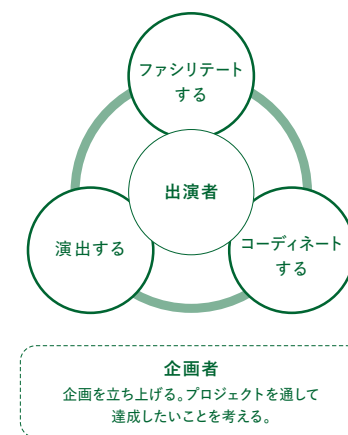
◎コーディネートする…出演者とファシリテーターや演出家などスタッフをつなぐ。参加者のサポートを担う。

- ・ 地域の外国人支援団体等とのコミュニケーション
- ・ 出演者が安心して参加できる運営ルールやスケジュールの設定
- ・ 出演者へ言語を配慮した連絡
- ・ 出演者の状況を把握し、ワークショップや稽古の設計に助言・調整する。
- ・ 出演者の特質を生かすチーム作りとスタッフ間の連携・調整

◎演出する…企画主旨+ワークショップでの成果を作品化につなげる。

- ・ ワorkshopで生まれた身体表現やエピソード等を組み合わせ、文化的背景の異なる様々な観客に見せるための上演台本や構成案を作成する
- ・ 出演者の心理的・身体的安全性への配慮（個人的なエピソードを作品へ反映させる際の本人確認）
- ・ パフォーマンスとしての出演者の表現・創造性を引き出す
- ・ 舞台・音響・照明へのプラン提案
- ・ クリエイションのプロセス(稽古スケジュール)を作成

在住外国人との演劇プログラム
実施・運営のための3つの役割



5-3 人材育成プログラムのまとめ

1 受講者から担い手へ

本プロジェクトにおける人材育成の成果のひとつは、「受講者」が芸術文化に主体的に関わる「担い手」へと意識を移行させていった点にあります。当初はワークショップや創作現場に参加する立場であったメンバーが、場の運営や進行、参加者間の関係調整といった役割を担い始めました。とりわけ多様な言語背景を持つ参加者同士のコミュニケーションが、外国人参加者の心理的なサポートとなっていました。

2 運営メンバーによる知見の共有と並走

プログラム参加者が担い手としての役割を担っていく過程を支えたのは、様々な現場での「市民参加型プログラム」の経験を積み重ねてきた外部運営メンバーの存在です。人材育成には相応の実践期間が必要であり、現場の複雑な状況判断を担うメンバーが並走することで、参加者が段階的に役割を広げていくための環境が担保されました。手法の伝達に留まらず、活動を通じて現場で培われた知見を共有し続けるプロセスが、プロジェクトの質を維持する基盤となりました。

3 運営上の課題

継続的な人材育成を実装するうえで、いくつかの課題も明らかになりました。

◎育成対象者が現場実務を担う際のサポート体制の構築
安全管理、参加者対応、トラブル時の判断など、経験を要する領域については段階的な伴走が求められ、サポート側の人的リソース確保も含めた体制設計の重要性が浮き彫りとなりました。

◎実務的条件の整理

契約形態や謝金、活動時間の設定といった実務的条件の整理も、持続的な参画を促す上で検討すべき論点として共有されました。

4 今後に向けて

これらの成果と課題を踏まえ、今後の人材育成においては、実践と学びが循環する仕組みづくりがより一層求められると考えます。具体的には、ワークショップや創作現場への段階的な参画機会の設計、役割移行を見据えた伴走プロセスの明文化などがあげられます。人材育成の取り組みは、担い手を育てることにとどまらず、プロジェクトそのものの持続性を支える基盤となり、今後の実践の広がりへとつながっていくものであることが確認できました。



プロジェクト参加者の声

プロジェクトの実践を通して生まれた参加者の声を手がかりに受講者、在住外国人である参加者、観客それぞれの立場から寄せられた言葉を集めました。実践の現場で重ねられてきた経験や気づきを紹介します。プログラム設計や成果整理だけでは捉えきれない側面を補足するものとして、まとめました。

「多文化社会における演劇ワークショップ開発」(2023)

◎受講者レポートより

- ・受講者①：演劇には言葉で説明しきれない力があると感じました。インドネシアの青年と“10年後の再会”を演じたとき、夢を語るだけでは届かない感情まで共有でき、短時間で心の距離が縮まりました。実際の再会でも昔からの友人のように話せたことが印象的で、演劇が心の会話を生む場になると実感しました。
- ・受講者②：参加者でありファシリテーターでもある立場を経験し、マジョリティ／マイノリティという枠を超えた関係性を体感しました。夢や名前をテーマに語り合うワークでは、個人の物語から相手の背景まで想像が広がり、自然と共感が生まれました。演劇空間だからこそ、安心して互いを知ろうとする関係が育まれたと感じます。
- ・受講者③：『名前』をテーマにした対話が特に印象的でした。日本では意味を込めて名付けますが、ミャンマーでは生まれた曜日で名前が決まることが多く知り、大きな発見がありました。言葉が十分に通じなくても、身体表現や想像力、遊びの要素を通して理解が深まり、多文化の価値観に触れる豊かな時間となりました。

◎ワークショップ実践協力団体「Villa Education Center (VEC)」より

これまで何度も演劇の力を実感してきましたが、特に印象的だった場面があります。活動参加が3回目ほどの日本語学習者が、ある日の実践で「主役」のような役割を担い、他の参加者から賞賛を受けました。活動後には「今日はとても自信がもてました。これからも参加します」と語り、その後も継続して参加しています。ワークショップ実践後の振り返りでも、「楽しかった」「また会いたい」といった声が多く寄せられました。日本語学習者だけでなく、ピジターやファシリテーターからも「温かかった」「元気をもらった」といった感想が聞かれ、この場が参加者全体にとって心地よい出会いの場となっていたことがうかがえました。[(VEC) 代表理事 松尾慎氏のコメントより要約]

「TBTP——異文化間の対話から演劇を立ち上げるための創作トレーニング・プログラム」(2024)

◎座学「移民・難民との創作」講師：パッサム・ガジ氏の言葉より

創作で大切にしているのは、人間の上に演劇があるのではなく、人間のために演劇を用いるという発想です。移民や難民ルーツの若者たちと2007年に立ち上げた『Import Export Kollektiv』では、戦争体験や差別の記憶が語られると同時に、『同じ思いをしている人がいる』と知ることで参加者が解放されていきました。その経験から、苦難への同情にとどまるのではなく、舞台上立つ一人ひとりが力を取り戻し、観客をもエンパワーする作品を目指しています。安心して語れる環境を整え、人々と“ともに”つくるプロセスこそが創作の核だと考えています。

◎プログラム終了後の受講者オンライン座談会より

- ・受講者①：企画をゼロから構想し、プレゼンまで行った経験が強く印象に残っています。多様な背景を持つ受講者同士で、ワークの形式を重視するのか、そこで生まれるコミュニケーションを重視するのか対話を重ねました。価値観の違いに向き合いながらひとつの企画へまとめていく過程そのものが、多文化の協働を体感する学びとなりました。
- ・受講者②：WS 開発の議論では、『ある価値観を提示することを主軸にした企画』について意見を交わしました。その対話を通して、関係性の築き方や参加者との向き合い方を改めて考える機会となりました。参加者の主体性や匿名性を尊重することなど、自分が大切にしたい姿勢や企画の軸を言語化できた経験として印象に残っています。
- ・受講者③：在留外国人との企画は、当初は生活史を扱う構想でしたが、次第に『異邦人への恐れ』をどう変えていくかという視点へと発展しました。自身の留学経験とも重なり、知らないことが距離を生む感覚を思い返しました。実際にWSを行うと、同じ空間で過ごす中で関係性がやわらぎ、自然に対話が生まれていく変化を体感しました。

「TBTP」(2025)

〈クリエイションプログラム〉『Door to Door』

◎参加者(出演者)アンケートより

- ・ I enjoyed the opportunity to create art even when I'm not from this country and even when my Japanese level is only the beginner. I also enjoy that I could share ideas and stories with other people and connect with people from Japan as well as outside Japan. I felt that this project unites all people regardless where are they from. (この国出身でなくとも、日本語レベルが初級であっても、創作活動ができる機会を楽しめました。また、アイデアや物語を他の人々と共有し、日本国内外の人々と繋がれたことも喜びです。このプロジェクトは、出身地に関わらず全ての人々とひとつに結ぶと感じました。)
- ・ いろいろな国の人と一緒に作業して、考え方や表現の違いに触れたこと。言葉が通じなくても、体の動きや空気通じ合える瞬間があって、それがすごく面白かった。プロから演技を学び、観客の前で披露する貴重な場でした。
- ・ It was an amazing opportunity to grow as an aspiring actor, as well as a person. The workshops made me think and feel deeply about my life before coming to Japan, which allowed me to answer personal questions about my identity and belonging. I met many friendly, supportive and open people from many other countries that I would not have met otherwise. It made me realize again that there are many more things which connect us to others, than which makes us different. (俳優志望者として、そして一人の人間として成長する素晴らしい機会でした。ワークショップを通じて、日本に来る前の人生について深く考え、感じることができ、自分のアイデンティティや居場所に関する個人的な問いに答えを見つけることができました。他の国々から来た、親切で支え合い、心を開いた多くの人々と出会いました。参加しなければ会うことのなかった人々です。私たちが他者と結びつけるものは、私たちが異なるものにするものよりもはるかに多いということ、改めて実感させられました。)

◎観客アンケートより

- ・ 出演者お一人お一人のバックグラウンド(詳しくは全く存じあげませんが)を想像するだけで涙を堪えるのに大変というか、それぞれの方が持っているもののパワーというのはそのままものすごいものだと感じました。これからさらにお芝居が深まってゆくのを楽しみます。ぜひ観たいです!
- ・ 出演者それぞれの想いが丁寧に描かれていました。最後に壁がなくなった時、向こう側の客席が見えて、開放感とともに少しはずかしいような気持ちになりましたが、この舞台で表現されていること、多文化共生は出演者だけの物語ではなく、観ている観客も当事者の1人なんだと改めて感じました。

〈ステップアッププログラム〉『記憶を探検する』

◎参加者(出演者)アンケートより

- ・ I really enjoyed the entire workshop, especially the way the coordinators talked to us and gave helpful advice on improving our performances. (ワークショップ全体がとても楽しかったです。特に、コーディネーターの方々が私たちに話しかけ、パフォーマンス向上のための有益なアドバイスをくださった点が素晴らしいです。)
- ・ もうひとつのグループとの合同の時間がもっとあればよかった。素敵な方々なので交流したかったそれぞれの日本に来るに至った背景をシェアする時間があつたらよかったかも(でも言いにくいケースもあるだろうから難しいのかも)
- ◎観客アンケートより
- ・ 出演者との距離が近く、語りや想いが強く伝わってきました。参加者同士もテーブルを囲みながら話を聞き、最後の問いに向き合う中で親近感が生まれていきました。インタビューの言葉を作品化する際、何を残し何を削るのか、その選択の重さにも心を揺さぶられ、対話の必要性を強く感じました。
- ・ 等身大の自分で表現に飛び込んでいる姿に、異国で生活するバイタリティを感じる。中には疲れを全面に打ち出す人も。それもまた現実。記憶の連鎖、ゼムクリップと輪ゴムの繋がりが象徴的。
- ・ 「声が小さく聞き取りづらい」と感じるタイミングもありましたが、日本語で伝えることを意識して話して下さっていたので概ね理解して楽しめました。外国語の時は行動で、演劇的に受け止めました。

劇場は社会のセーフティネットになれるか

——国籍を越えて「同じ場と時間」を共有する実践

関鎮京(北海道教育大学岩見沢校准教授)

2025年6月末時点の在留外国人数は395万6,619人と過去最多を更新し、総人口の3.2%を占めるに至った。東京都においても、2026年1月現在、約78万人(在住外国人比率5.5%)と、こちらも過去最多を記録している。都内の一部自治体では外国人人口が10%を超えており、今後も増加の一途を辿ることは明らかである。

一方、社会に目を向ければ、「多文化共生」の重要性が唱えられる傍らで、排外主義の風潮も強まりつつあり、社会ルールの遵守がこれまで以上に厳格に求められる傾向にある。このような状況下で、外国籍の人々が自分らしく、安心して自己をさらけ出し、表現できる場は果たして十分に確保されているだろうか。その場を保障することは、彼らにとって生存に等しい不可欠な要素である。劇場こそ、そうした表現の自由を担保する社会のセーフティネットとして機能すべき必要がある。

劇場は本来、文化的多様性が体现される「多文化」の場である。ゆえに、あえてこの言葉を標榜することに違和感を覚える向きも少なくないと思う。しかし、その「多文化」を形作る主体に着目したとき、表現の現場に、どれほど外国籍の人々が参画できているか。劇場は、「多様な主体」の欠落という現状に対し、どれほどの危機感を持っているのか。その真摯な姿勢が今、問われている。

筆者が東京芸術劇場の取り組みに注目し始めたのは、2021年度の「シアター・コーディネーター養成講座」である。多文化共生・国際交流分野と文化芸術をつなぐ「コーディネーター」の育成に着手した点は、極めて先見的であった。以来、同劇場は演劇経験の有無を問わず広く門戸を開放し、一貫して「多文化社会×アート」の人材育成に取り組んでいる。

2023年度、バッサム・ガジ氏のワークショップを見学した際、今も忘れられない光景がある。参加者が自らの「名前」を指の動きで表現し、それが肘や膝、全身の躍動へと広がり、やがてひとつのダンスへと昇華されていくワークであった。音楽が流れると、個々の動きは次第にひとつのうねりとなり、それぞれが個性を放ちながらも調和した、見事な舞台へと変貌を遂げた。ここで気づかされたのは、「名前」が誰にとっても等しく与えられた、極めて個人的で固有の起点であるという点である。社会的立場や言語能力、表現経験の差にかかわらず、自らの「名前」から始めることで、参加者全員が対等な関係で表現に関わることが可能になっていた。このワークの構造そのものが、自ら語る主体として立ち上がる契機を生み出していたのである。その意味で、「名前」を尊重されることは、自らの存在やアイデンティティが承認されることと不可分であり、人が人として尊重されるための前提条件のひとつと言える。誰もが自らの存在を起点に表現の主体となり、安心して関わることのできる場。それこそが一人ひとりの「居場所」となり、劇場が果たすべき本質的な役割ではないだろうか。

今年度は、昨年度の「Tokyo Borderless Theatre Project(TBTP)」人材育成プロジェクトを経て選ばれた二人の企画者による「ワーク・イン・プログレス」が公開された。鄭禹農さんによる〈クリエーションプログラム〉『Door to Door』と、張藝逸さんによる〈ステップアッププログラム〉プレゼンテーション『記憶を探検する』である。今回、両氏に対し、プロジェクトを実施する上で大切にしている点についてインタビューを行った。

台湾出身の鄭さんは、ワークショップ設計において「言語の使用を限定しない」ことを重要な実践として挙げている。参加者は日本語に限らず、母語や複数言語を用いて記述することができ、必要に応じて翻訳を付す形式が採られた。書く作業についても、事前に時間を確保できる「宿題形式」と、その場で行う「フリーライティング」を使い分け、いずれの場合も何語で書くか、どの内容を共有するかを参加者自身が選択できるよう配慮されていた。フリーライティングについては、鄭さん自身が過去に参加した日本のワークショップで、日本語で即座に書くことに強い困難を感じた経験を踏まえ、「何語でもよい」ことを明確にしたという。現在は翻訳ツールの活用も含め、参加者が自分の言語で考え、表現することが可能な環境が整えられていた。

また鄭さんは、「記憶」をテーマとするワークショップにおいて、参加者それぞれが向き合う記憶の重さや背景が異なることを前提に設計を行っていたと語っている。戦争体験や喪失といった、参加者にとって負担の大きい話題に触れる可能性があることから、二次被害を避けることを強く意識していたという。実際に、ウクライナ出身の参加者が戦争の記憶を語り、感情を大きく揺さぶられた場面では、ワークを一時中断し、全体で声をかけ合う時間を設けるなど、その場でのケアが行われた。

中国出身の張藝逸さんは、企画・制作の過程において、「立場の差」や「言語能力の差」がそのまま力関係にならないよう、配慮を重ねていたと語っている。張氏は、自身が外国籍当事者であることの強みと限界を自覚しつつ、企画者として上位に立つのではなく、同じ地平に立ち続ける姿勢を重視していた。自らも出演者として参加することでヒエラルキーの発生を抑え、演劇経験の少ない参加者に劇場の作法を伝える「文化的翻訳者」としての役割を担っていたのである。

また、観客との関係については、観る側を特定の理解へ導くのではなく、「通過者」として位置づけることを試みたという。ここでの「通過者」とは、その土地の歴史や他者の記憶を一時的に共有し、やがて通り過ぎていく存在を指している。観客自身もまた、人生や場所の「通過者」であるという視点を提示することで、属性を超えた共感が生まれる可能性が示された。上演後には、この意図に応えるかのように観客が会場に残り、自身の地域の記憶を語り始める場面が見られた。また、観客の一人が、上演をきっかけに池袋の中華圏の飲食店へ足を運んだというエピソードも共有してくれた。

今回の「ワークインプログレス」の試みを通じて、外国籍の人々が表現の主体となり、その声を観客が同じ場と時間の中で受け止めることの重要性をあらためて確認することができた。インタビューで鄭さんは、「完全に分かり合えなくても、隣にいることはできる」「そばにいることや、気配を感じることがすごく大事だ」と語っている。これらの発言は、同じ空間に居合わせ、同じ時間を共有することの大切さに言及したものである。

このような「共有」の積み重ねこそが、属性や国籍を越えた相互理解の礎となり、劇場が社会に対して開かれた場所へと変容していくための確かな一歩になると、筆者は信じている。そしてその歩みは、特別な誰かのためのものではなく、今この社会に共に生きる私たち一人ひとりにとって、身近な課題として受け止められなければならないと考える。

おわりに

「TBTP」は、2023年度の基盤整備から始まり、3年間にわたる実践を通じて、多文化共生社会に向けた演劇という手法を用いたひとつのモデルケースを構築してきました。本書では、3年間の歩みを振り返り、その背景、目的、実施プロセス、そして現場から得られたさまざまな気づきを整理しました。多様な言語的・文化的背景を持つ人々と作る演劇の場をどのように育んでいけるのか——その問いに挑戦したプロセスの記録でもあります。

プログラムを重ねていく中で印象的だったのは、クリエイションの出演者一人ひとりから発せられた、表現の場を求める切実な声でした。それは、舞台芸術の表現に限らず、自身の経験や感じていることを、「日本語」の縛りから解放されて他者へ伝える、自身の物語を自分なりの表現で表出する場を求めているということです。クリエイションの過程では、言葉だけでは届きにくい思いや記憶が地図や写真、そして語りなどの表現を通して少しずつ共有されていきました。その積み重ねが、信頼関係を育て、新たな表現・創作へとつながっていく様子が数多く立ち上がっていました。演劇的手法が、創作のための技術であると同時に、人と人のあいだに橋を架ける媒介となり得ることを、実感をもって確認する機会となりました。

劇場は、作品を上演するための単なる箱ではありません。異なる文化的・歴史的背景を持つ人々が出会い、自らの物語を紡ぎ、同時に他者の物語に真摯に耳を傾けることができる「社会の結節点」としての役割を担っています。TBTPが取り組んできたのは、人々の間に横たわる心理的な壁を取り払い、劇場の公共性を再定義する試みでもありました。在住外国人が観客として客席にいただけでなく、表現者として、あるいは劇場を支える主体として、当たり前そこに存在する風景。それを実現するためには、私たちの意識を常にアップデートし続け、既存の枠組みを疑う勇気が求められています。

「TBTP」の3年間の記録が、劇場関係者をはじめ、舞台芸術を通じた社会包摂的な実践や、多文化共生に関わるプロジェクトに取り組む方々にとって、何らかの手がかりとなれば幸いです。ここに記した方法やプロセスはひとつの実践例に過ぎませんが、それぞれの地域や現場の状況に応じて読み替えられ、新たな試みへとつながっていくことを願っています。

東京芸術劇場



実施記録

2023年度

ドイツ 移民との演劇創作の現場より

多文化社会における演劇ワークショップ開発——デュッセルドルフ市立劇場市民参加部門 芸術監督 バッサム・ガジ氏を迎えて——

〈実施期間〉

2023年11月–2024年1月

〈日時・内容〉

◎**オリエンテーション**

日時：2023年11月15日(水) 19:00–21:00

◎**ワークショップ開発**(計6日)

2023年11月29日(水)–12月5日(火)

1) 11月29日(水) 10:00–18:00 ワークショップ開発①

2) 11月30日(木) 10:00–15:00 ワークショップ開発②
18:30–21:00公開オンラインレクチャー視聴

3) 12月1日(金) 10:00–18:00 ワークショップ開発③

4) 12月2日(土) 10:00–18:00 ワークショップ開発④

5) 12月3日(日) 10:00–18:00トライアル・ワークショップ実践

6) 12月5日(火) 10:00–18:00総括

講師：バッサム・ガジ | 講師アシスタント：柏木俊彦 | 通訳：小高慶子、岡本美枝 | 記録：松尾加奈

◎**ワークショップ実践**

日時：2023年12月17日(日) 9:00–14:00

協力：VEC

◎**フィードバック**

日時：2024年1月31日(水) 15:00–17:00

◎**公開オンラインレクチャー**

「移民、難民、多様なルーツをもつ人々との演劇創作——

デュッセルドルフ市立劇場の事例より——」

日時：11月30日(木) 18:30–21:00

講師：バッサム・ガジ、モデレーター：楊淳婷

協力：デュッセルドルフ市立劇場 D' haus、VILLA EDUCATION CENTER(VEC)、ゲーテ・インスティトゥート東京

2024年度

Tokyo Borderless Theatre Project

——異文化間の対話から演劇を立ち上げるための

創作トレーニング・プログラム

〈実施期間〉

2024年11月–2025年3月

〈日時・内容〉

◎**オリエンテーション**(オンライン)

日時：2024年10月25日(金) 19:00–21:00

◎**知る**[**オンライン・レクチャー**] *一般公開あり

レクチャー監修：関 鎮京

レクチャー 1

「日本における「移民」の増加と多文化共生の課題」

日時：11月10日(日) 17:00–19:00

講師：高畑幸 | モデレーター：楊淳婷

レクチャー 2

「北海道江別市の演劇ワークショップ実践と検証」

日時：11月12日(火) 18:30–20:30

講師：平田未季、納谷真大 | モデレーター：関鎮京

レクチャー 3

「可児市文化創造センター alaの演劇公演の取組み」

日時：11月22日(金) 17:00–19:00

講師：鹿目由紀、中尾栄治、山田久子 | モデレーター：関鎮京

◎**体験する**[**ワークショップ参加等**]

フィールドワーク1

「外国人支援団体が主催する日本語学習活動への参加」

日時：11月–1月(毎週日曜10:00–12:00)のうち1回参加

フィールドワーク2

「東京芸術劇場が実施する、多様な人々とのワークショップ見学」

日時：11月4日(月・休)、11月9日(土)、1月11日(土)のうち1回見学

ワークショップ1

「①テキストの強弱と身体の強弱のチューニング」
「②当事者性の強弱とドラマ構造のブレンド」

日時：①1月12日(日) 14:00–17:00 ②1月19日(日) 14:00–17:00

講師：中野成樹

ワークショップ2

「俳優のイメージネーションと協働する演出 そのひとつの具体例」

日時：2月9日(日) 14:00–17:00

講師：岡田利規

◎**作る**[**企画作成、実践**]

プラクティス1

「企画プレゼン&フィードバック」

日時：12月8日(日) 10:00–17:00

プラクティス2

座学「移民・難民との創作」

日時：12月14日(土) 18:00–21:00

講師：バッサム・ガジ

プラクティス3

「トライアル・ワークショップ実践①+フィードバック」

日時：1月26日(日) 10:00–17:00

プラクティス4

「ワークショップ実践に向けた稽古」

日時：2月15日(土) 10:00–17:00

プラクティス5

「トライアル・ワークショップ実践②+フィードバック」

日時：2月16日(日) 10:00–17:00

講師：中野成樹、関鎮京

プラクティス6

「企画プレゼンテーション」

日時：3月8日(土) 18:00–21:00

講師：バッサム・ガジ、岡田利規、若林朋子、東京芸術劇場プロ

デューサー

協力：ケルン市立劇場、VILLA EDUCATION CENTER (VEC)、

ゲーテ・インスティトゥート東京

企画協力・制作：一般社団法人ベンチ

2025年度

〈クリエイションプログラム〉

ワークインプログレス『Door to Door』

企画・構成・演出：鄭禹晨

演出・ファシリテーター：櫻井拓見

演出補佐：森内康博、佐川大輔

舞台美術：廣瀬正仁

照明：関定己

照明オペレーター：たけうちみずゑ

音響：斎藤裕喜

映像オペレーター：中原くれあ

〈ステップアッププログラム〉

プレゼンテーション『記憶を探検する』

企画・構成・ファシリテーター：張藝逸、佐川大輔、佐藤令奈、

関根好香

〈クリエイションプログラム・ステップアッププログラム共通〉

記録撮影(写真)：木村雅章

記録撮影(映像)：米田浩章

宣伝美術：矢島健

通訳：岡本美枝(ドイツ語)、鈴木なお(英語)

翻訳：ティナ・ロズネル(英語)

通訳サポート：永田景子(英語)

記録：前田真美

広報協力：鈴木奈津子

(東京芸術劇場)

制作チーフ・コーディネーター：村上理恵

制作：新井ひかる、今村舞、松淵彩子

制作アシスタント：中村一規、神田萌子

プロデューサー：田室寿見子

アウトサイドアイ：バッサム・ガジ

協力：明治大学 国際日本学部 萩原健

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

本プログラムは、東京芸術劇場の「多文化共生に向けた演劇制作の現場から学ぶ」の一環として実施されました。

Tokyo Borderless Theatre
Project

2023→2025

在住外国人とともに作る
市民演劇プログラムと
その担い手育成のための
プログラム実践

執筆・編集:

前田真美
東京芸術劇場

写真:

木村雅章
(表1、P.02,06,10,20,24,25,26、表3、表4)
川島彩水(P.01,31,36)

デザイン:

三上悠里

企画:

東京芸術劇場
アーツカウンシル東京

発行:

公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北4-1-28
九段ファーストプレイス5階
03-6256-8435
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>
©アーツカウンシル東京


発行日:

2026年3月24日

*営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許
可なく複製・転用・販売などの二次利用するこ
とを禁じます。





 東京都


ARTS COUNCIL TOKYO

東京芸術劇場

Tokyo
Metropolitan
Theatre